

2018 TOEIC[®] セミナー報告書

企業が求めるグローバル人材像と
社会を見据えた大学英語教育
～ TOEIC[®] Programの様々な活用方法 ～

●2018年9月15日(土) ACU博多

企業が求めるグローバル人材像と 社会を見据えた大学英語教育 ～TOEIC® Programの様々な活用方法～

2018年 9月15日(土) ACU博多

基調講演 山九株式会社 1

次なる100年に向けてのグローバル人財戦略

取締役兼常務執行役員(人事・労政担当) 米子 哲朗 氏

事例発表 ① 佐賀大学 7

佐賀大学における英語教育強化体制と 英語特別選抜コース「ISAC」

副学長・全学教育機構長 早瀬 博範 氏

事例発表 ② 西南学院大学 14

標準化英語テストの結果から西南学院大学の現状を探る： ～「語学の西南」における課題と文学部改組への決断～

文学部・外国語学科 英語専攻 教授・文学部長 伊藤 彰浩 氏
文学部・外国語学科 英語専攻 教授・入試センター長 藤本 滋之 氏

主催 一般財団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会
後援 福岡商工会議所

次なる100年に向けての グローバル人財戦略

取締役兼常務執行役員(人事・労政担当) 米子 哲朗 氏



次なる 100 年を見据えた グローバル展開の歩みと課題

■ 物流事業と機工事業を主体とした 九州発の企業

山九株式会社は九州で生まれた会社ですが、普段なかなか皆さんと直接接する場面の少ない会社です。そういった環境の中で様々な事業展開、ならびに人財育成を行っておりますので、今回はその一部であるグローバル人財育成戦略についてご紹介させていただきたいと思います。

当社は今年、10月1日の創立記念日に創業 100 周年を迎えます。そこで、いろいろな記念事業を行うと共に、人財戦略にも次なる100年を見据えた施策を盛り込みながら新たな事業運営の一步を踏み出しているところです。

事業としては、物流事業と建設業における機械工事(機工)事業を行っている会社です。社員は約3万人。そのうち、約6割が日本国内に勤務し、約4割が海外で採用し、勤務している海外ナショナル社員になります。事業所数は、日本国内に41拠点と関係会社が51社、海外に現地法人が43社あります。グループ全体の売上高は2016年度に念願だった5,000億円を超え、2018年3月期には約5,300億円に上りました。

当社の発祥は1918年、北九州の地で港湾運送業を始めた「山九運輸株式会社」です。「山九」は、北九

州の「九」と徳山の「山」から成り、当初は北九州港と徳山港の港湾荷役を行っていました。経済学者によれば、企業や組織の存続・寿命はだいたい30年だそうで、当社も多分に漏れず、約30年を機としてステップアップしてきました。1918年に「山九運輸株式会社」として創立し、港湾運送事業を行っていたのが第一世代になります。

その後、1959年に社名を「山九運輸機工株式会社」に改め、生産財、工場構内の物流事業や機工事業を始めたのが第二世代です。

1980年に社名を今の「山九株式会社」に変えてからの第三世代では、機工事業は建設だけでなくメンテナンスや修理にまで領域を拡大し、物流事業も港湾だけでなくロジスティクスといわれる兵站機能を加え、事業展開を一層深めてきました。

そして、これから第四世代に入っていくわけですが、ここが当社のターニングポイントになります。現在、物流事業は、お客様の生産を支えるサプライチェーンをつなぐ物流を一貫して引き受け、優劣のない均一な品質のサービスを提供する「3PL(サードパーティーロジスティクス)事業」を行っています。機工事業についても同じような考え方で、お客様の工場・設備を一括で預かり、それを保守点検しながら常に安定操業できる形にすると同時に、完成検査が可能なメンテナンスサービスまでを提供する「3PM(サードパーティメンテナンス)事業」に注力しています。

加えて、次の100年に向け、それらを上手に融合させ

ながら新しいビジネスを開拓していかなければなりません。その際、大きなポイントとなるのが海外です。

■ 中国・東南アジアを中心に海外展開を拡大

ここで、当社のグローバル展開の歩みと現状について説明したいと思います。グローバル展開にも、大きく3つの波がありました。

海外での仕事が始まったのは1950年代からです。当時は、日本のプラント企業が海外へ進出し、各地に工場を作り、海外でモノを生産し始めた頃です。当社も「山九運輸株式会社」から「山九運輸機工株式会社」へと変わり、重量物の中でも特にプラント輸送が主力となりつつありました。製鉄所、石油化学工場、造水プラントなど、各種生産財を作る工場を建設するための重量物を運ぶことで、海外へと進出していきました。その後、中国や東南アジアを中心として徐々に海外での付き合いが増え、当社も現地法人を作り始めました。この頃の中国は、まだ工業化が進んでおらず、当社のような日本の企業が主導して、会社経営や生産プロセスについて指導を行っていました。また、共産圏

の中国は省が違えば国が違うといった感じで、中国国内に1社会社を作って各省に支店網を張るという日本のやり方が通用しません。そのため、各省に現地法人を作り、独自のネットワークを築いていきました。

2000年代に入ると、本格的に各現地法人のネットワークを活用しながら、インドやサウジアラビアなどに領域を拡大していきました。

■ まだまだ少ない海外売上高

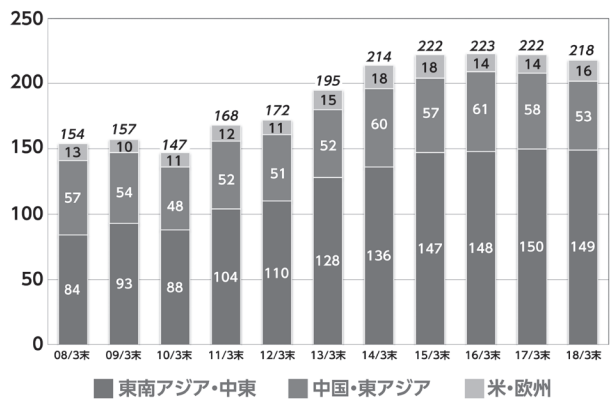
(資料1)にあるように、現在、海外には中国や東南アジアを中心に43の現地法人があります。これらの海外現地法人に赴任している日本人社員数は、2018年3月末の時点で218人に上ります(資料2)。だいたい5年を目安としてローテーションしていますので、約200人のうち、毎年約40人が新たに任命されて海外に出て行き、約40人が海外から日本に帰ってくるようになります。

ところが、(資料3)をご覧ください。先ほど述べた通り、グループ全体の売上高は約5,300億円になりますが、そのうち、海外の売上高は全体の約18%しかありません。社員の構成は日本国内と海外が約半々な

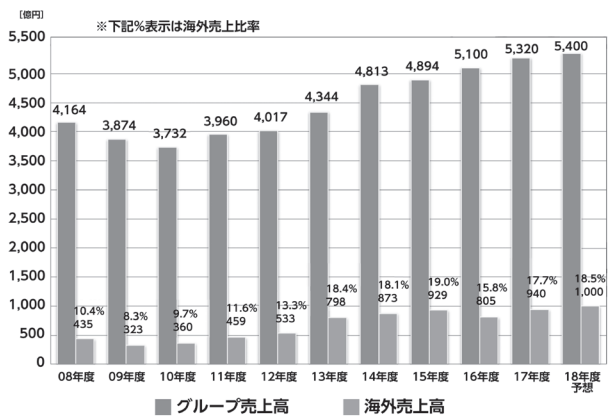
のに対し、売上高は約18%しかない。要因として考えられる問題はいくつかありますが、この売上高を少なくとも半分まで上げていかなければならない。そのためには、グローバル展開を一層拡大し、海外での売り上げを増やしていく必要があります。さらに、日本は少子高齢化が叫ばれており、人口減少に伴って消費量も少なくなっていくことが予想されます。日本国内でモノを作っても売れないので作る必要がないという事態になれば、ますます海外に目を向けていくしかありません。

従って、第二の海外進出が次の100年に向けたテーマであり、先ほど説明した物流事業・ロジスティクスと機工事業・メンテナンスの両面をいかに海外で運用していくか、そのための人材をどうやって確保・育成していくかが大きな課題となっています。

(資料2) 海外赴任者数の推移



(資料3) 海外売上高の推移



(資料1) 山九グループの海外拠点

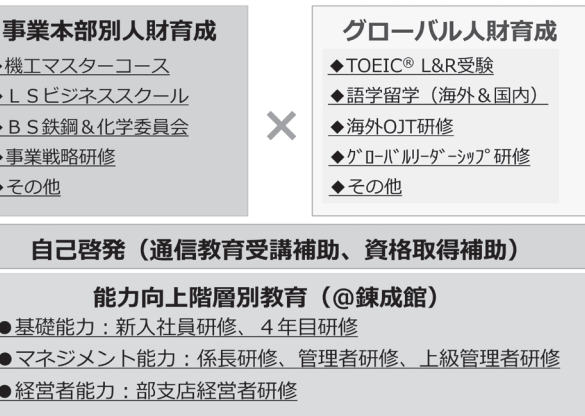


「いつでも・どこでも“山九品質”」に向けたグローバル人材育成戦略

■ 独自の人材育成戦略

当社の人材育成体系は(資料4)の通りです。

(資料4) 人材育成体系の基本



一般的な日本の企業と同様に当社も、職能資格制度を社員育成のベースとしています。これは、能力に応じて社員を評価し、資格を与えるもので、資格をステップアップさせることによって処遇を変えていきます。そのため、当社では階層別の教育を重要視しています。

当社には創業者の出生地、長崎県平戸市に「錬成館」という研修センターがあります。ここで階層別に対象社員を集め、一元的に研修を行う、能力向上階層別教育を実施しています。50年前に作られた施設ですが、創業100周年を記念して2018年3月末にリニューアルしました。

ここでは例えば、イスラム教の人のためにお祈りできるスペースを設けたり、豚肉を使わないハラル料理を用意したりするなど、言語や宗教などにも十分配慮しながら、多国籍の人たちを受け入れられる仕組みを整えています。

また、階層別教育とは別に、通信教育の受講や資格取得を補助する自己啓発の制度を横断的に提供しています。

そして、それらの上に物流事業、機工事業、本部と事

業別に行う教育を積み重ねています。

大学を卒業した新入社員が当社に入ってまず驚くのが、入社後すぐ仕事に就くことはないということです。例えば、理系出身の新入社員の場合、「機工マスターコース」という大学のマスターコースに準じたところで、1年間、勉強だけをやってもらいます。宿泊施設に入り、事業展開に必要な技術的な基礎について、朝から晩まで勉強していただきます。また、物流系の社員には「LS ビジネススクール」という基礎教育を用意しています。これも新入社員として入社してから約10週間、泊り込みで朝から晩まで勉強します。このようにして、事業展開に必要な部分については、会社に入ってから徹底的に教えています。従って、当社は他社と比べて教育にかける時間がかなり多いと思います。

■ コミュニケーションとしての英語の必要性

グローバル人財の育成は、この事業本部別人財育成と並列して行っています。とはいえ、グローバル人財の育成はなかなか簡単にはいきません。

先ほどご説明しましたが、当社の海外現地法人は世界各地に散らばっており、現地の人を海外ナショナル社員として雇用しながら会社運営をしています。そのため、各現地法人にはその国特有のやり方や慣習というものがあり、それが、山九グループ全体として運営していく上での足かせになることもあります。

まず、同じ言語で話すことができません。日系企業ですから、本来なら社員全員に日本語で話してもらってコミュニケーションが取ればよいのですが、インドネシア、マレーシア、シンガポール、サウジアラビア、中国、これらの国々はすべて言語が異なります。

しかし当社は、異なる国や地域でも同じ品質のモノやサービスを提供する「いつでも・どこでも“山九品質”」をグローバル人財戦略のキーワードとして掲げています。その実現のためには、管理レベルや作業レベルなどを均一にする必要があります。それはつまり、同じ

レベルで話す、同じレベルで理解する、ということであり、これがいわゆる「コミュニケーション能力」だと考えています。

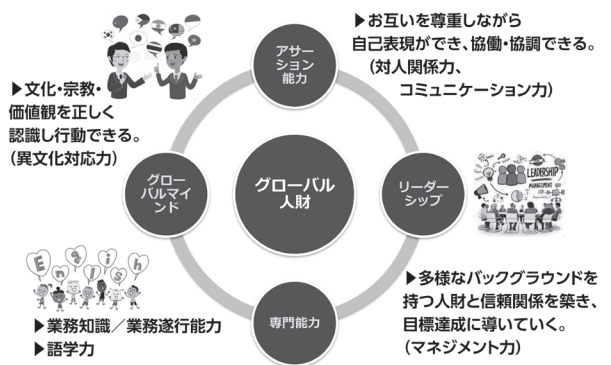
それを全世界的に共通でやろうとすると、言語については、やはり英語が一番理解しやすいということになります。“山九品質”を実現するための管理レベルを英語で伝えられる日本人社員を育成しながら、同時に英語で理解できる海外ナショナル社員を育成する。そして、彼らが現地語に訳して他の社員に伝えるというようなやり方で、現在、グローバル展開ならびに人財の育成を行っています。

■ グローバル人財戦略における課題と取り組み

当社が求めるグローバル人財像を可視化したものが（資料5）です。一番上にアサーション能力というのがあります。当社が最も大事にしているのが、この中のコミュニケーション能力です。

仕事上のスキルには、3段階のスキルがあると思います。1つは一番ベーシックなテクニカルスキル、技術・技能です。次に重要なのが、ヒューマンスキル、コミュニケーション能力です。そして最後が、コンセプチュアルスキルという概念化能力です。これがないと、いろいろな事業戦略を俯瞰できる人財になれません。この中間に位置するコミュニケーション能力こそが非常に

（資料5）求めるグローバル人財像



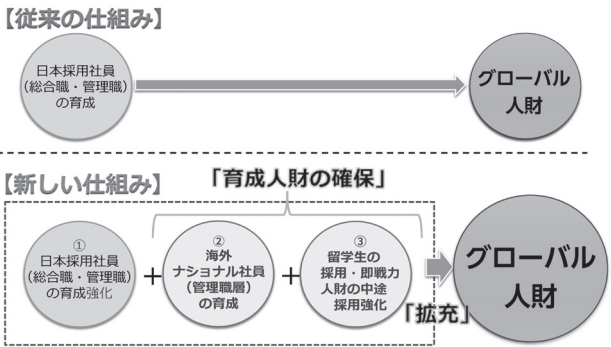
重要で、説明する力、その説明を聞く力、そして理解する力になります。

先ほど、常に200人前後の日本人社員が海外に出ていると述べましたが、実は、海外赴任を含む転勤を前提とする社員は限られており、総合職社員と管理職社員のみがその対象となっています。その総数は約2,400人で、そのうちグローバル人財として管理されているのは、全体の35%にあたるわずか840人しかいません。つまり、この母数から常に200人前後を海外に出し、かつ約40人を毎年入れ替えていかななくてはならないという状況なのです。

海外での事業拡大に向けてタイムリーにグローバル人財を配置していくためには、グローバル人財の数そのものをもっと増やさなければならない、なおかつ、グローバル人財としてのレベルも上げていかなくてはなりません。これが、当社のグローバル人財戦略における最も大きな課題です。

そこでまず、グローバル人財として育成する社員の対象を、従来の日本国内採用の総合職・管理職社員のみから、管理職層の海外ナショナル社員にまで広げると共に、留学生の採用・即戦力人財の中途採用も強化することにしました（資料6）。

（資料6）「グローバル人財拡充」と「育成人財確保」への取り組み



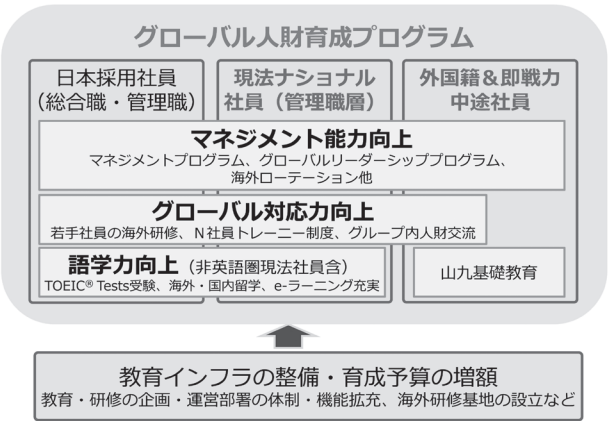
日本採用社員の育成強化については、事業別のグローバル人財スキルの明確化や、若手社員の早期育成プログラムの再構築、語学力向上支援の充実を行っています。一方、管理職層の海外ナショナル社員の育成については、日本でのマネジメント能力向上教育のレ

ベルとの統一化を図ると共に、日本で1～2年間OJT研修として実施するトレーニー制度などの仕組みづくりを進めています。さらに、留学生や即戦力となる人財の中途採用の強化については、海外現地法人でのインターンシップ制度を導入しています。

このように、10年ほど前から、管理レベルの統一を図りながらグローバル人財育成プログラムを再構築してきました（資料7）。

現在、海外に赴任している日本人社員は218人ですが、ゆくゆくは現状の約200人を少なくとも300人にしたいと考えています。

（資料7）グローバル人財育成体系の再構築（管理レベルの統一）



■ TOEIC® L&Rを活用した英語コミュニケーション能力の育成

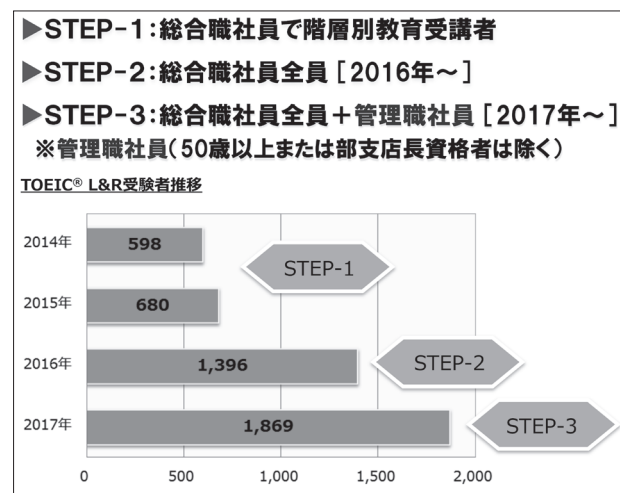
■ TOEIC® L&R の受験対象者を拡大

英語教育に関しては、2004年の導入以来、TOEIC® Listening & Reading Test（以下、TOEIC® L&R）をベースとしたプログラムを新入社員研修や各階層別教育などに取り入れています。

2014年には、総合職社員のうち、階層別教育の受講者にTOEIC L&Rの受験を義務化しました。2016年には総合職社員全員、さらに2017年には、50歳以上または部支店長資格者を除く管理職社員まで受験

対象者を拡大しました。その結果、2017年のTOEIC L&R 受験者数は1,869人に上り、これは義務化した2014年の約600人と比べると約3倍になります。(資料8)。

(資料8) TOEIC® L&R 受験の義務化



一方、TOEIC L&R 受験者の平均スコアはというと、2014年度の374点に対し、2015年度は408点まで上昇したものの、その後、受験対象者の拡大によって徐々にダウンし、2017年度は378点となってしまいました。今後の目標は、英語力の底上げを図ることによって、2020年までに400点未満の社員を全体の50%に減らし、受験者の平均スコアを450点にもっていくことです。

■ TOEIC® L&Rスコアを人事システムで管理

このTOEIC L&Rのスコアは、社内の様々な取り組みに広く活用しています(資料9)。

その1つが、海外適性フラグ管理への反映です。海外適性フラグ管理とは、海外勤務の適性を人事データに基づいて管理する当社独自のシステムで、英語力については、TOEIC L&R スコア500点を基準にスコアに応じて星の数を決定しています。

(資料9) TOEIC® L&R受験結果の活用

▶海外適性フラグ管理へ反映		※海外適性フラグ管理とは、海外勤務に適性が高い社員を人事データで管理するシステム。(★の数は最高で5つ)
●500~695点	▶▶▶「★」	
●700~895点	▶▶▶「★★」	
●900~	▶▶▶「★★★」	
▶語学留学・海外研修の人選条件へ反映		
●国内語学留学 (APU: 500点以上 / IUJ: 600点以上)		
●海外語学留学 (ELSシカゴ校: 750点以上)		
●グローバルリーダーシップ研修: 550点以上		

また当社は、国際大学(IUJ)や立命館アジア太平洋大学(APU)、海外ではELSシカゴ校など国内外の様々な大学とも交流を行っていますので、そういった場所での語学留学や海外研修の人選の際にもTOEIC L&Rスコアを活用しています。日本人社員が海外に行って語学を学んだり研修を受けたりするだけでなく、海外ナショナル社員を日本に受け入れて英語教育を行ったりもしています。

最後になりますが、「ありがとう」が当社のキャッチフレーズです。英語でいう「サンキュー」で、社名もその駄洒落が由来です。社名の通り非常にウィットに富んだ会社ですので、将来海外に行って活躍したいという学生さんには、ぜひ当社に入社していただきたいと期待しております。

佐賀大学における英語教育強化体制と英語特別選抜コース「ISAC」

副学長・全学教育機構長 早瀬 博範 氏



「TOEIC® L&R 全員受験」を支える3つのプログラム

■ 全学部の1、2年生がTOEIC® L&Rを受験

佐賀大学は、6学部・3キャンパスからなる中規模国立大学で、私は1、2年生の教養教育を管轄する全学教育機構の機構長を務めています。昔は全国的に同じ教育を行うことを目標としていた国立大学ですが、法人化後は、それぞれが1つの事業所として責任を持って特色づくりに取り組むようになりました。

大学は今、グローバル人材の育成が1つの大きな使

命となっています。なぜなら、グローバルな力というのが、社会人としての必須能力になりつつあるからです。かつてのコンピューターと同じように、今後は英語によるコミュニケーション能力が学部や専門を問わずすべての大学生に必要なだということで、本学も2013年度から「TOEIC® Listening & Reading Test (以下、TOEIC® L&R)全員受験」を柱とした様々な改革を進めてきました。

本日は最初に、TOEIC L&R を中心とした独自の英語教育体制「3つのTOEIC」についてご紹介したいと思います(資料1)。

1、2年生は、全学部で前期と後期にそれぞれ英語の授業が設定されています。

(資料1) 3つのTOEIC



新入生はまず、全員が6月に TOEIC L&R 団体特別受験制度 (IP: Institutional Program、以下 IP テスト) を受けます。ここで学生の入学時の英語力をみます。そして、このテスト結果に基づいて、3 段階の習熟度別クラスを編成します。

さらに、教養教育が終わる2年生の12月頃にもう1回、全員にIPテストを受けさせています。TOEIC L&R の良いところは、スコアの比較によって約2年間で英語力がどれだけ身に付いたかを数値で知ることができる点です。また、この2回目の TOEIC L&R IP テストのスコアは、2年生後期の英語科目の成績にも反映しています。

一般的に、日本の大学生の英語力は、英語を専門とする学部・学科の学生を除き、4年間で徐々に下がっていくと言われています。英語は言語ですから、使わなければ自然と衰えていきます。しかし、入学時をピークに英語力が落ちるとするのは、決して望ましいことではありません。

そのため本学では、TOEIC L&R IP テストを1回受験して終わりにするのではなく、最低 2 回受験させることで学生の英語力の維持・向上を図ることにしました。この2回分の受験料は無料で、費用は大学が負担しています。

英語の能力を測る試験はいろいろありますが、本学では試験の汎用性、認知度、学生のニーズ等を勘案し、総合的に TOEIC L&R が最も学生に合っているのではないかとということで採用しました。

■ 受験をサポートする2つのプログラム

しかし、ただ TOEIC L&R IP テストを受験させるだけでは英語力は身に付きません。そこで、受験をサポートする体制も作りました。

・自学自習を促す e-learning 教材

多くの学生は大学に入ってから初めて TOEIC L&R

を受けます。そこで、TOEIC L&R を紹介すると共に、受験に向けての英語力を付けさせるための e-learning 教材「e-TOEIC」を作りました。先ほど、英語の授業を習熟度別に3つのクラスに分けていると説明しましたが、一番下位のクラスの学生にはこの「e-TOEIC」の受講を必須にしています。つまり、受講しなければ単位が取得できません。ある程度こちらからプッシュをかけないとやらない学生も少なくないので、このような仕組みとしました。もちろん、「e-TOEIC」は本学の e-learning システムで公開していますので、学生は誰でも無料で利用することができます。

・事前に TOEIC® L&R を体験できる模擬試験

もう1つが、「Pre-TOEIC」です。TOEIC L&R IP テストは6月(1年生)と12月(2年生)に実施していますが、学生が事前に無料で予行練習できるテストを独自に作成しました。この模擬試験を「Pre-TOEIC」と呼んでいます。受験は原則希望制で、希望する学生には事前に申し込みをしてもらっています。

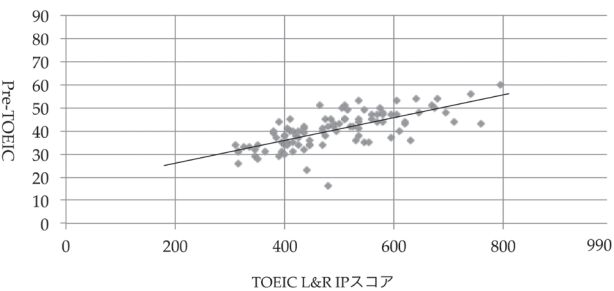
加えて、2 年生への進級時にも個々の最新の英語レベルに応じたクラス替えが必要だろうということで、そのタイミングで、全員に「Pre-TOEIC」を受けてもらっています。1年間頑張った学生は上のクラスに上がることができるようにすることで、学習へのモチベーションを上げる効果もあります。

この「Pre-TOEIC」は、TOEIC L&R と同じ試験時間2時間のフルバージョンに加え、お試し版としてのハーフバージョンも用意しています。特に、初めて TOEIC L&R を受験する学生の中には、「いきなり2時間は耐えられない」「とりえず、どういう流れ、形式なのか大まかに全体を把握したい」という声も多いので、ハーフバージョンはリスニング30分、リーディング30分の計1時間としています。また、e-learning かペーパーのいずれかの受験方法も選択できます。各バージョン4本ずつ作成し、それらを適宜活用して実施しています。

多くの学生が「Pre-TOEIC」と TOEIC L&R IP テストの両方を受けていますので、過去に実施した結果を

基に、我々が作った「Pre-TOEIC」の信頼性も検証してみました。2つのテスト結果の関係を示したグラフが(資料2)です。内容としてはまずまずかなと判断しています。

(資料2) TOEIC® L&R IP スコアと「Pre-TOEIC」の相関関係 (2013年)



また本学には、「Pre-TOEIC」に加えて、大学生の基礎力とでもいうような、漢字が読める、日本語がきちんと使える、数学の基本が分かるということをチェックするテストがあります。そして、これらの成績をまとめた個票を各学生に e-learning システムを通じて配信し、「あなたはこういうところが弱いですよ」といったアドバイスをしています。

このように、本学ではただ TOEIC L&R IP テストを実施するだけでなく、受験をサポートする「e-TOEIC」と「Pre-TOEIC」を加えることで、一貫した英語教育の仕組み、教育体制を作り上げることができました。

■ IP テストのスコアを成績に反映

先ほど、2回目の TOEIC L&R IP テストのスコアを2年生後期の英語科目の成績に加えると述べました。内訳は、IP テストで500点以上取れば、成績評点はフルスコアの30点となります。490点台は29点、480点台は28点と、10点刻みで評点が1点下がります。スコアが245点以下の場合、評点は0点になります。

もちろん、これだけで成績が決まるのではなく、あくまで IP テストのスコアは評価全体の30%です。しかし一方で、教員は70%しか持てないと見ることもできま

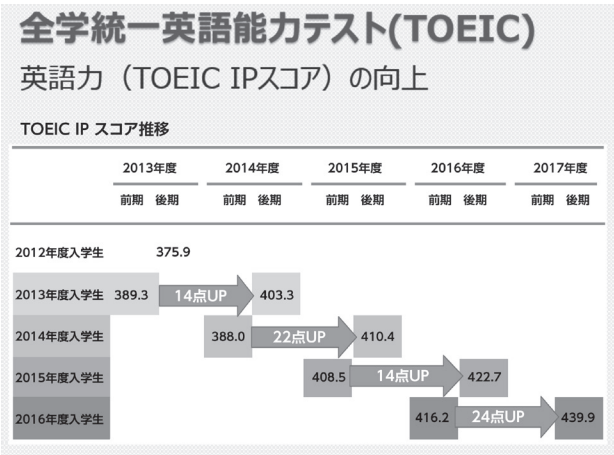
す。大事なことは教員がこの30%には一切関われない、下駄を履かせることができないということです。教員は最高で70点しか付けることができませんから、本学の場合は60点取れば一応合格にしていますが、学生も「ぼーっとしていちゃいけないな」という危機感を持って授業に臨んでいるようです。

学生や他の一部の先生からは、スコアを成績に反映することや、内訳基準について「厳しいのではないか」との声もありました。しかし、元英語教員としては、このくらいは学部を問わず大学生として取ってもらいたいという思いがありますので、変えないつもりでいます。

■ IP テストの平均スコアが1年半で最高24点アップ

2013年度に TOEIC L&R IP テストを全学部に導入し、1、2年生全員が受験することになりました。6学部全体の1学年あたりの人数は約1,400人で、その平均スコアを示したものが(資料3)です。スコア的にはまだまだというところですが、非常に喜ばしいことに、すべての年度で1年次より2年次のスコアが上がっています。2013年度は14点、2014年度は22点上昇し、2016年度の入学生は416.2点から439.9点と約24点も上昇しました。「1年生の時よりスコアが伸びた」という学生が約4割いましたので、彼らが平均スコアを

(資料3) TOEIC® L&R IP スコアの推移



押し上げてくれたことになります。

また、1年次の平均スコアそのものも、毎年少しずつ上がってきています。確かな理由は分かりませんが、大学説明会などの場で本学が英語力向上に力を入れていることを強調してもらっているので、本学に入学したいと考えている学生の自覚も変わってきているのかな、という気がしています。

もう1つの理由は、大学入試の変更です。実は、本学の理工学部は今まで2次試験に英語を課していませんでした。しかし、入学後に最も英語を必要とするのが理工学部です。教授陣も「もっと(教養教育で)英語教育をやってくれ」と言っているのに、入試で英語力を求めている。それではおかしいだろうということで、入試科目に英語を加えることにしました。

入学後も、学生には常々「2年生の終わりにになったらもう一度IPテストがあって、その結果が成績の30%に含まれるよ」と伝えていまして、学生は強くそのことを意識しながら日々の学習に取り組んでいるのではないかと思います。

■ TOEIC® L&R 導入による 6 つの効果

TOEIC L&R IP テストを導入してよかった点をまとめてみました(資料 4)。まず、入学以降下がっていた英語力が上がりました。同時に、学習目標が設定できたことで、我々も学生に対して「ここまでいけよ」「評点で30点取るためには、TOEIC L&R IP テストで500点とらないといけないよ」と具体的な数値を示せるようになりました。

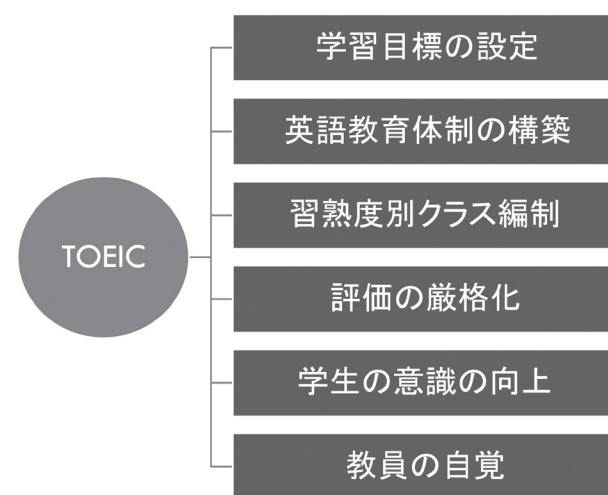
それから、TOEIC L&Rを柱とした英語教育体制ができました。

英語の授業を習熟度別に行えるようになったことも大きいです。本学には多様な入試があるので、中には英語があまり得意ではない学生も入ってきます。しかし、それを放っておくわけにはいきません。学生のレベルに合った授業を行うことで、効率的な指導が可能になりました。

さらに、評価の厳格化にもつながりました。

最も大きな変化は、学生の意識の向上です。「佐賀大学に入ったら、英語を勉強しなくちゃいけない」と自発的に考えてくれるようになりました。その意識の変化が数値となって現れた一例が、大学図書館の図書の貸出数です。TOEIC L&Rに関する教本を中心に、図書の貸出数が6倍に増えました。生協でのTOEIC L&R関係の図書の売れ行きも8・5倍に増えました。

(資料 4) TOEIC® L&R IP テスト全学実施の効果



それに伴い、学生の自宅での学習時間も増えました。日本の大学生の自宅での学習時間の全国平均は1時間もないと聞きますから、そのような状況が少しでも改善されたことはとても良い傾向だと評価しています。

教員の意識も変わりました。従来教員は、担当する学生の学びの成果に対する意識が弱かったのですが、学生の英語力がスコアで示されれば、嫌でも比較されることになります。教員も授業の成果が具体的に求められるようになったことで、目標を実現するための授業をしなくてはならないという自覚が生まれました。

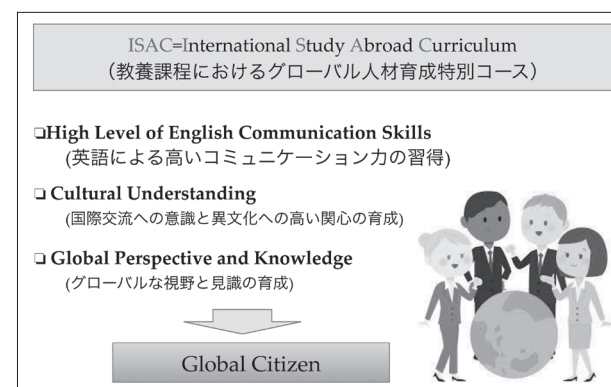
■ 教養課程における英語特別選抜コース「ISAC」

■ トップ層の伸長を目的とした英語特別選抜コース

次に、英語教育における特別コース「ISAC (アイザック)」についてご紹介します。

今まで説明してきた取り組みは、全般的な英語力の底上げを目的としたものですが、この「ISAC」はトップ層の伸長を目的として設けました(資料 5)。

(資料 5) 英語特別選抜コース「ISAC」



全学部の入学予定者約1,400人に入学式前の4月1日、「英語力を伸ばしたい、将来留学したい学生はいませんか」とアナウンスし、「ISAC」の受講希望者を募ります。その後、集まった受講希望者にTOEIC L&Rに似た1時間程度の試験を行います。そのスコア上位50人を、学部を超えて選抜し、2年間英語を鍛えています。

「ISAC」が目指すのは、英語による高いコミュニケーション能力の習得です。英語は、ただ話せるだけでは何にも役立ちません。ですから、英語だけでなく、異文化に対する知識やグローバルなものの方、国際的な知識なども身に付けたグローバル人材を育てたいと考えています。

■ 「ISAC」の5つの特徴

大きな特徴は、教養課程のほとんどの科目の授業がネイティブスピーカー教員によって行われることです。教養課程は2年間で取らなくてはならない単位数が決まっていますが、「ISAC」ではその約7割の授業を英語で行います。つまり、2年間ほぼ英語漬けになるということです。

また、1クラス当たりの人数は約20人です。一般的なクラスは40～50人なので、環境が全く異なります。当然、アクティブラーニングも活発になり、コミュニケーションスキルを直接鍛えることができます。「ISAC」では、教養科目のほとんどを英語で受けることによって、発音などのスキルだけでなく、文理を問わず、様々なことを英語で話したり、プレゼンしたり、ディスカッションしたりできる力を身に付けられるようになっています(資料 6)。

(資料 6) Appeals of ISAC

- 1.Students selected by test
(全学部の希望者からテストで50名を選抜)
2. English Native Speakers' Classes
(教養課程の約7割を英語ネイティブの授業で履修)
3. Small-size classes for English Proficiency
(少人数クラスで英語運用能力の育成)
4. Remarkable Improvement of English Ability
(英語力の飛躍的な伸び)
5. Passport to the World
(留学へ直結)

■ 受講生による満足度も高い

受講生に「ISAC」の満足度を聞いてみました。

「実際にこのコースに入ってどうだった？」という問いには、8割が「満足している」と答えました。一般的な英語クラスの場合、「満足している」との回答は2割あればよいほうですから、高い満足度が得られていると思います。

それから、「自分で英語力が伸びたと実感しているか?」という問いには、ほぼ全員が「伸びたと実感している」と回答しました。

一方で、「授業内容はハードですか?」との問いには、「ややしんどい」という回答が多くなりました。2年間みっちり鍛えるコースなので、やはり学生にとってそれなりの厳しさがあるようです。学生の本音としては「正直しんどいけれど、英語力は確かに伸びているので満足している」といったところでしょうか。

■ 「ISAC」から留学への道を拓く

実際、「ISAC」に在籍する学生は TOEIC L&R IP テストのスコアの伸びが違います。もともと平均以上の学生が多いのですが、2年間でさらにスコアがぐっと伸びます(資料 7)。2年生の時の平均スコアは 600 点近くあり、ほぼ半分の学生が、長期留学が可能なレベルに達しています。大学のシステムや個人の事情などもあり、全員とまではいきませんが、それでも8、9割の学生が「ISAC」を経て短期研修、または長期留学に参加しています。今後は、長期留学の参加者数をもう少し増やさなくてはと考えています。

(資料 7) Achievements of ISAC

半数が 長期留学可能				
入学年度	第1回TOEIC L&R 平均点(A)	第2回TOEIC L&R 平均点(B)	上昇点 (=B-A)	学年全体の 平均上昇点
2013	552.9	628.6	+75.7	+14.0
2014	562.8	594.4	+31.6	+22.4
2015	553.5	603.7	+50.2	+14.2
2016	613.7	638	+24.3	+23.7

■ 教養教育全体のカリキュラム改革へと波及

先ほども述べた通り、単なるスキルだけでは高い英語コミュニケーション能力があるとはいえません。そこ

で、「英語を学ぶ」というスキルから「英語で何を話すか」というコンテンツ重視の方向へと、一般的な英語の授業のカリキュラムも変えようとしています。

また、高校などでは既に英語による授業が行われていますが、大学では未だ日本語による授業が多いので、上位クラスからまず英語による授業への転換を図っています。英語にふれられる機会を増やすため、授業以外の講座なども設けています。

■ 全国初のCBTによる
英語 4 技能試験の開発

■ 大学入試改革で変わる高校教育の現場

最後に入試改革についてです。佐賀大学では、英語 4 技能を測る入試を、タブレット端末を使って実施しようと考えています。

これまで、大学入試ではスピーキングやライティングの能力が問われないため、高校の授業でもあまり重視して育成されないという問題が指摘されてきました。

現行の学習指導要領は「聞く・話す・読む・書くの 4 技能をバランスよく育成すること」を求めており、次期学習指導要領や高大接続改革における大学入試改革もその方向性を引き継いでいます。さらに、2020 年度から実施される「大学入学共通テスト」では、4 技能を測る民間の英語資格・検定試験を活用することになります。本学も同様に、入試できちんと英語 4 技能を問うべきだという考えに基づき、4 技能を測る独自の試験の開発に取り組み始めました。

■ 4 技能をバランスよく組み合わせた設問

現在開発中の 4 技能試験は、タブレット端末で行います。既に高校で試行しています。

問題数は 8 問の予定です。コミュニケーションは聞く・読む・話す・書くの 4 つの技能がいろいろ重なり合っ

て成り立っていますから、聞いて話す、読んで書く、読んで話す、といったように複数の技能を組み合わせた構成としています。例えば、絵を見てその絵が何をしている場面かを口頭で説明する、英語の動画を観てその内容を記述する、といった問題を想定しており、試験時間は約 30 分です(資料 8)。

(資料 8) 問題構成

番号	問題形式	問題の内容	技能
1	Reading Aloud	100 語程度の英文の音読	R+S
2	Qs & As (基本型)	日常的な英語の質問を聞き、それに対して英語で応答	L+S
3	Qs & As (タスク型)	相談窓口で相手の英語による質問に対して、あらかじめ決められた内容に沿って英語で応答し、ミッションを達成する	L+S
4	Picture Describing	一枚の絵の内容を口頭で説明	S
5	Giving Advice	アメリカ人学生の悩みを聞いて、英語でアドバイス	L+S
6	Giving Information	英語の広告に対する電話での質問に対して、英語で情報提供	R+L+S
7	Video Describing	英語の解説付きのビデオを観て、内容を英語で記述	L+W
8	Reading & Data Explanation	二つの資料(<i>Japan Times</i> の記事とグラフ)から「日本の男女格差」を口頭で説明	R+S

具体的な時期は未定ですが、諸問題もだいぶクリアできてきましたので、近々 AO 入試や推薦入試から導入していきたいと考えています。実現すれば、全国初の試みになるかと思います。

大変ではありますが、大学入試を変えていかなくても、グローバル社会で求められる英語力を学生に身に付けさせることはできません。使えない英語力ではどうにもなりませんから、なんとか頑張って実現したいと思っています。

標準化英語テストの結果から 西南学院大学の現状を探る： 「語学の西南」における課題と 文学部改組への決断



伊藤 彰浩 氏



藤本 滋之 氏

西南学院大学における TOEIC® Testsの活用

文学部・外国語学科 英語専攻 教授・文学部長

伊藤 彰浩 氏

■ 2004年度に TOEIC® L&Rを導入

西南学院大学文学部長の伊藤です。私からは、本学におけるTOEIC® Testsの活用と、私が行ったTOEIC® Listening & Reading Test (以下、TOEIC® L&R) の妥当性に関する研究についてお話しします。

まず、TOEIC L&Rの活用の歴史を簡単に振り返ってみます。本学は、2004年に国際ビジネスコミュニケーション協会(IIBC)の賛助会員となり、文学部英語専攻の新入生を対象としたプレースメントテストとしてTOEIC L&Rを導入しました。その翌年、2年生の進級時に再度実施したところ、約1年間の学びによって平均スコアが100点ほど上昇しました。

その後、TOEIC L&R 公開テストの申し込みが大学生協でできるようになり、受験対象が全学部へと広がりました。当時、学生たちは学長のサイン入りスコア表を就職活動に利用していました。

■ 3年生修了時の目標は600点以上

本学では現在、TOEIC L&R スコアを基準として、各

学年の修了時の到達目標を設定しています。英語関係の学科・専攻以外の学生は、1年生の修了時に480点、2年生の修了時に530点、3年生の修了時に600点の取得が目標です。一方、英語関係の学科・専攻(文学部英語学科・英語専攻)の学生は、1年生の修了時から順に600点、700点、800点としています。この目標値が高いか低いかは分かりませんが、私個人としては、英語を専門に学ぶなら、もう少し高いスコアまでいけたら良いなと思っています。もちろん、文学部英語専攻の学生の中には、留学等は一切したことがなく、日本での学びだけで3年生の修了時に990点を取得した学生もいます。

■ 推薦入試合格者への教育や 単位認定にスコアを活用

本学における過去3年間のTOEIC L&Rの実施状況は(資料1)の通りです。この他にも、様々な形で TOEIC Testsを活用しています。

まず、推薦入試で合格し、入学が決定した学生を対象に、入学前教育として TOEIC L&Rの受験を義務付けています。

入学後は、経済学部と商学部が TOEIC L&R スコアを英語科目の単位認定に活用しています。また、法学部、商学部、人間科学部心理学科では、TOEIC L&Rの受験を義務付け、授業評価と合算して最終的な評価

(資料 1) 西南学院大学での TOEIC® L&R 活用状況 (過去3年間の受験状況)

年度	テスト名称	受験者数	備考
2017	TOEIC IPテスト	2,190	法律学科、心理学科が新たに、前・後期各1回ずつ受験を義務化。(計5学科が受験を必須化)
	TOEIC公開テスト	1,802	
2016	TOEIC IPテスト	1,282	国際関係法学科、商学部(商、経営)で前期、後期各1回ずつ受験を義務化。テスト回数を年3回(6月、11月、12月)から5回(6月、7月、11月、12月、2月)に増加。
	TOEIC公開テスト	1,384	
2015	TOEIC IPテスト	726	※テストは年に3回(6月、11月、2月)
	TOEIC公開テスト	1,552	
		※いずれも、延べ人数	
		※IPテストは2016年度以降、年5回実施	
		※公開テストは、各年度で10回実施	

を決定するといった仕組みも導入しています。

一方、TOEIC® Speaking & Writing Tests (以下、TOEIC® S&W)の受験は文学部の英文学科と英語専攻の一部の学生に限られており、全学部への浸透にはもう少し時間がかかりそうです。

また、社会人を対象とした夜間のエクステンション講座にもTOEIC L&Rの対策講座があります。

■ 文学部が誇るよき伝統

ところで、現在の西南学院大学文学部には英文学科と外国語学科があり、さらに外国語学科の中に英語専攻とフランス語専攻があります。学生の卒業時の満足度や、スキル系科目・留学制度の充実度は高く、卒業後も長く交流が続いているなど、教員と学生の距離の近さも自慢できる伝統の1つです(資料2)。

一方で、創設の経緯などにより各学科・専攻が独自の性格・性質を持つことから、実質この3つは独立した組織として運営されています。そのため、学部内の教員、学生同士の交流や情報の共有が若干弱い点が、課題として議論されてきました。

(資料 2) 西南学院大学文学部が守るべき生命線

現在の文学部 英文学科、外国語学科 (英語専攻・フランス語専攻)
 ① 半世紀以上にわたる文学部の伝統
 →文学部を作っているのは学生
 ② 教員と学生の距離の近さ
 ③ 卒業時の満足度の高さ
 ④ スキル系科目の充実
 ⑤ 留学制度の充実

■ TOEIC® L&R スコアから見る 文学部生の英語力

文学部の学生の英語力を、TOEIC L&R スコアから見てみたいと思います。

まず、入学時の平均点は500点前後です。英語専攻をはじめとする多くの学生は、最初の1年間で約100点伸びる可能性があります。先ほど述べた通り、文学部はスキル系科目が充実しているので、まじめに予習・復習をすれば、自然と英語漬けの生活になります。

さらに、私が統計解析をしたところ、1年生の修了時

点で650点に到達している学生は、3、4年生の早い段階で800点以上を取る可能性が高いことが分かりました。ただしこれは、上位20～30%弱の学生に限られます。そして、3年生から4年生にかけての伸びは限定的で、個人差が大きくなりました。

これは文学部の学生の1つの特徴でもあります。入学時の標準偏差が大きいので、学年が上がるにつれて上位の2割は全体の母集団から離れていきます。どんどん普通に伸びていく学生と、なんとなくそのまま伸びずにいる学生とに分かれていくといった感じです。

特に留学による影響は大きいと思います。例えば、スコアが伸び悩み3年生の初めまで約600点だった学生が、留学先から帰国して3週間後にTOEIC L&Rを受けたら930点も取ったというケースがありました。その学生は、英語力だけでなく、思考力も鍛えられて大きく成長していました。

グローバル人材を育成する体系的な学びと留学の位置付け

■ 西南学院大学における国際交流と留学

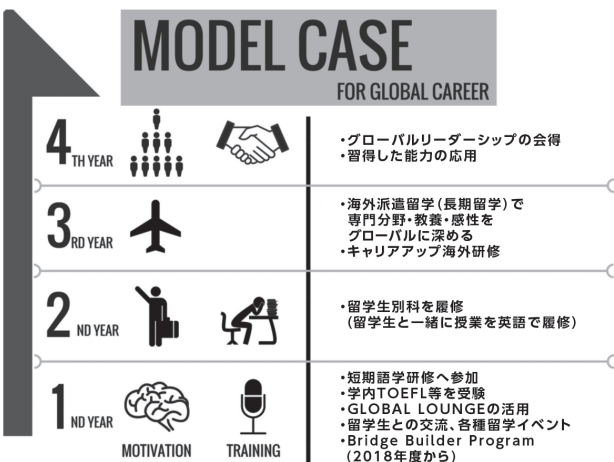
本学の国際交流は、「国際社会で活躍し、世界平和に貢献する人材を育成」することを目的として、「全学生の10%が海外で異文化体験」「キャンパスの国際化8,000人の国際交流」「海外大学との連携 教育研究力の強化」の3つを基本方針に掲げています。

また、海外留学には主に「海外派遣留学制度(長期)」「短期語学研修制度(短期)」「キャリアアップ海外研修(短期)」の3つがあり、そのうち「海外派遣留学制度(長期)」には毎年約80～90人が参加しています。私としては、できれば100人突破を目指したいのですが、様々な事情もあり、今はまだそこまでいっていません。

本学の国際センターで作成しているグローバル人材育成のためのモデルケースが(資料3)です。1年生から短期語学研修への参加やTOEIC Tests等の受験を始め、2年生以降は留学生別科の学生との交流等に

よって英語力をブラッシュアップしていきます。そして3年生の後期から4年生の前期にかけて長期海外派遣留学を経験し、帰国後さらに語学力やスキルを伸ばしたい学生は、キャリアアップ海外研修等に参加する。そうすることで、卒業までの4年間でグローバルリーダーとしての意識や感覚を身に付けることができると考えています。

(資料 3) Model case for Global Career



■ 留学の目的は「語学」＋「人間形成」

ここで、留学を経験した学生のTOEFL スコアの変化について簡単にふれておきたいと思います。

私が行った研究の結果、学生が海外派遣留学に応募した時と合格して留学が内定した時、そしてそれから実際に留学するまでの間、スコアの推移にはある共通の傾向がありました。つまり、スコアは常に上昇していくのではなく、学生のモチベーションによって勉強をする時としない時があり、それに伴って大きく変動するということです。

この傾向を教員はどう判断すべきか。TOEIC TestsやTOEFLといったテストを通過儀礼として捉えるのか。それとも、定期的な英語力診断として活用するだけでなく、学生の気持ちや内面にまで踏み込む指導をして、学生の態度・意欲をも変えていく必要があるのか。我々教員は、この点について本質的な議論をしなくては

いけないと考えています。

昨今の学生は、様々な背景や考えをもっています。例えば、3、4年生の時に留学することによって就職活動に出遅れることを非常に怖がる学生がいます。TOEIC TestsやTOEFLのスコアが良くても「とりあえず留学はやめておこう」と早々に撤退する学生も少なくありません。

これらのことから、現状のプログラムでは学生の学びの選択肢を限定してしまうのではないかと、留学をどうカリキュラムの中に位置付けて提供するのかをもう少し踏み込んで考える必要があるのではないかと、という結論に至り、学内でいろいろ検討してきました。

私は学部長として、机上での外国語学習を、意味を中心とした人間同士のやり取りにどう結びつけていくのか、今一度しっかり学生に伝えていく必要があると考えています。それは、外国人の友達とけんかをしたり仲直りをしたりという、ありふれた日常のコミュニケーションの中で語学を身に付けていくと同時に、異なる価値観や異文化への理解を深め、プラスアルファの人間形成を図っていくことが外国語修得における最終段階だと思うからです。

そのためには、TOEIC Tests等のスコアの変化についても、全体の傾向に一喜一憂するのではなく、一人ひとりの学生の変化を冷静に見極めながら、次の学びにつながる留学やその先のキャリアについて、教員と学生と一緒に議論することが必要だと思います。

■ 文学部を改組して外国語学部へ

今までお話ししてきたことを踏まえると、大切なのは1年生の後期、つまり秋学期第2セメスターの目的の明示化ということになります。

そこで、現在ある英文学科、外国語学科の英語専攻、フランス語専攻を1つの学部・学科にまとめ、履修モデルを参考に自分で自発的に学びを組み立てる、学生の自律性を重んじた最新型カリキュラムに変更することにしました。既に2020年4月、現在の高校2年生が入

学する年度から、文学部を外国語学部へ改組する準備をしています(資料4)。

(資料 4) 新学部・学科の概要

項目	改組後	改組前
学部・学科名称	外国語学部 外国語学科	文学部 英文学科 外国語学科英語専攻 フランス語専攻
学位名称	学士(外国語学)	【英文学科】学士(英文学) 【英語専攻】学士(英語学) 【フランス語専攻】学士(フランス語)
中心学問分野	外国語学	英文学、英語学、フランス語
開設年度	2020(平成32)年度	—
入学定員	300名	300名
収容定員	1,200名	1,200名
入学時期	4月	4月

新学部では、1年生から基礎演習などを通じて、将来のことを考えさせる授業を展開すると同時に、1年生の後期からの留学も可能なプログラムにしようと考えています。さらに、2年生以降の学びと留学とのリンクを強化して、「将来こうすることがやりたい人は、この留学プログラム」といったようにカリキュラムの中で明示していく考えです。

一方で、長年培ってきた文学部の良さは、変革による新しい伝統のスタート地点と位置付けます。つまり、学生の満足度については、今までの「楽しかった」からもう少しアカデミックな意味合いでの「楽しかった」に変える、スキル系科目と留学制度のつながりを一層充実させることで、科目の体系の中に海外での学びを組み込んでいく、といったことです。

さらに、新たにGCS(グローバルコミュニケーションスタディーズ)、英語、フランス語の3つの科目群を明確にします。本学の文学部には、コミュニケーション学を専門とする教授陣がいますので、グローバルな視点で、他者との意思疎通を円滑にするためにどのような学びが必要なのか提案することもできると思います(資料5)。

〔資料 5〕 新学部・学科の概要

改革：新しい伝統をつくるために必要なこと
① 伝統→変革による新しい伝統のスタート
② 教員と学生の距離の近さ→さらなる充実
③ 卒業時の満足度の高さ→内容を踏まえた対応
④ スキル系科目と留学制度の連結と充実
→科目の体系の中で海外での学びを配置
⑤ 新しい科目群の設定→GCS科目群の設定
⑥ 学生の自律的な学びの支援
→履修モデル、自分で判断、決定、学習

■ TOEIC® L&R の妥当性についての研究結果

ところで、私は 2008 年に地元愛知県の大学からこの西南学院大学に移ってきたのですが、その際にIIBCから研究助成金をいただく機会があり、様々な研究を企画・実施してきました。2010年度には、本学だけでなく、九州や関東地方の大学にもご協力いただきながら行ったTOEIC L&Rの妥当性に関する検証研究において、日本言語テスト学会の論文賞も受賞することができました。今回はその研究成果についても少しご紹介したいと思います。

あるテストが測定すべきものをどれくらいきちんと測定しているかということを示す指標として、Messick が 1989 年に妥当性を測定する 6 つの側面を挙げました (資料 6)。

内容的側面とは、測定対象とした能力をきちんと反映したテストかどうかということ。本質的側面とは、正答率が増えればきちんと得点が上がり、能力が高いですよというように、目に見えない英語能力を量的に換算するその考え方が正しいかどうかということ。また一般化可能性は、テストで高い結果を出した人は、テスト以外の場所でもその能力を発揮して、「やっぱりテストがよくできる人は、できるよね」ということが言えるのかどうかということ。外的側面とは、一生懸命勉強すれば英語力が上がり、上がった分がきちんとテストの得点に反映されるのかどうかということ。そして、最後の結果

的側面とは、我々はいろいろなテストを通して単位認定や採用といった意思決定をするわけですが、その決定に対して多くの人が納得できるような結果をもたらす可能性があるかどうかということです。

〔資料 6〕 TOEIC® L&Rの妥当性検証

Messick (1989) :
妥当性は、以下の 6 つの側面 (facet) から測定可能。
(1) 内容的側面 (content facet)
(2) 本質的側面 (substantive facet)
(3) 構造的側面 (structural facet)
(4) 一般化可能性 (generalizability)
(5) 外的側面 (external facet)
(6) 結果的側面 (consequential facet)
伊藤彰浩 (2013). 「ラッシュモデルによるTOEICの構成概念的妥当性検証」
『JACET九州・沖縄支部紀要』18, 23-42.

検証の結果、TOEIC L&R は常に受験者集団を包むように問題のレベルが設定され、最も高い得点を取る受験者でも解けない項目や、すべての受験者が解答できるような非常に易しい項目も用意されていることが分かりました。私たちはこの誰でも解ける項目を「オアシス項目」と名付け、この項目の存在によって、受験者が受験の最中にバーンアウトするのを防ぐことができているのだと考えています。

また、TOEIC L&Rの問題を奇数項目と偶数項目それぞれに分けても同じような結果が推定できるかという検証も行いましたが、結果はとても安定していました。すなわち、奇数項目では高得点なのに、偶数項目では低い得点となる受験生の率が極めて低かったということです。

これらの結果から、TOEIC L&Rはきわめてパワフルで安定したテストだということが分かりました。これだけ安定したテストは、なかなか見つけるのが難しいと思います。そこで、私は大学の研究で独自にテスト開発も行っているのですが、自分で作ったテストが本当に安定したテストなのかということを調査する際にも外部基準の 1 つとして TOEIC L&Rを活用させてもらっています。

■ 西南学院大学における入試制度改革

文学部・外国語学科 英語専攻 教授・入試センター長

藤本 滋之 氏

■ 我が国の英語検定試験導入の経緯

入試センター長の藤本です。私からは、本学の新たな入試改革についてご紹介したいと思います。

まず、大学入試への英語検定試験の活用の経緯を簡単にまとめてみました。

2015 年 2 月、上智大学が文学部英文学科で初めて一般入試に「TEAP 利用型」を導入し、多くの受験生を集めました。

さらに 2017 年 2 月には、早稲田大学が文化構想学部と文学部の一般入試に「英語 4 技能テスト利用型」を導入しました。

両大学とも、英語検定試験のスコアを受験資格として利用している点は同じです。しかし、上智大学は英語以外の 2 科目についても記述式を増やすなど特別な試験問題を作成し、他の一般入試とは別に試験日を設けました。一方、早稲田大学は、英語以外の 2 科目は他の一般入試と同じ日に実施しています。

■ 多様な入試に TOEIC® Tests のスコアを活用

西南学院大学は、2016 年 2 月から大学入試センター試験利用入試や公募制推薦入試などに英語検定試験を活用しています。

大学入試センター試験利用入試については、みなし満点方式を採用し、CEFR B2 レベル、つまり TOEIC Tests なら TOEIC L&R スコア 785 点、TOEIC S&W スコア 310 点の計 1,095 点以上で満点としています。

一方、従来 AO 入試、公募制推薦入試と呼んでいた試験は、文科省の方針を先取りして本年度から「総合型選抜入試」という名称に改めました。この入試では、学部・学科によって基準が異なりますが、出願資格とし

て英語検定試験を利用しています。

さらに、神学部、文学部、経済学部、法学部では、2019 年 2 月に実施する一般入試から英語検定試験を活用した「英語 4 技能利用型」を導入します。本学の場合は、早稲田型をベースとし、英語以外の 2 科目は他の一般入試と同日に受験していただきます。もちろん、英語も受験して他の一般入試と併願することも可能ですので、従来の一般入試で合格し、英語 4 技能利用型入試でも合格するということもあります。

受験資格としては、英語検定試験のスコアを CEFR B1 レベル、つまり TOEIC Tests の場合は TOEIC L&R スコア 550 点、TOEIC S&W スコア 240 点の計 790 点以上としています。加えて、CEFR B2 レベルは 30 点 (国際経済学科は 40 点)、C1 レベルは 60 点 (国際経済学科は 80 点) が加算されます。

■ 新学部での活用

文学部を改組した外国語学部でも、継続して英語検定試験を入試に利用する予定です。詳細は (資料 7) をご覧ください。総合型選抜については、現在も議論を詰めているところです。

〔資料 7〕 新学部 (外国語学部) での検定試験利用入試

学部で一括募集 (現行のような学科・専攻ごとの募集はない)
・一般入試での英語 4 技能検定試験の利用を継続
・センター試験利用入試での「見なし満点」制を継続
・外国人入試、帰国生入試での利用を継続
・総合型選抜：複数のメニューを設定
→募集は学部一括でも入試のメニューにカリキュラム・ポリシーを反映させる。
(例) : 「最強の英語 A0」(仮称) 出願資格 CEFR B2 レベル以上
英語による講義を受講する学力が必要、などを検討中

最後に、英語 4 技能の評価を強化する意味をまとめてみました。1 つは、受動的な理解力だけでなく、主体的に思考・判断してそれを表現しようとする能力や、多様な人々と協働して主体的に学ぼうとする姿勢といった高校教育で培った学力の評価が挙げられます。加えて、

能動的なコミュニケーション能力や、複数の情報を比較検討し有意な一般化を導く能力、問題を発見し解決策を見出そうと努力する能力、論理的に議論を組み立てる能力など、大学教育でさらなる伸長が期待できる能力も見ることができると考えています。

我々は、これからも学生に良きインスピレーションを与えられる存在であり続けられるように努力していきたいと思います。2020年 4月開学予定の外国語学部への応援、どうぞよろしくお願いいたします。

発行月：2019年 2月

発 行：一般財団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会 (IIBC)

東京

〒100-0014 東京都千代田区永田町 2-14-2 山王グランドビル
TEL (03) 5521-5012 FAX (03) 3581-5512

名古屋

〒460-0003 愛知県名古屋市中区錦 2-4-3 錦パークビル
TEL (052) 220-0282

大阪

〒541-0059 大阪府大阪市中央区博労町 3-6-1 御堂筋エスジービル
TEL (06) 6258-0222

公式サイト

<https://www.iibc-global.org>

ETS, the ETS logo, PROPELL, TOEIC and TOEIC BRIDGE are registered trademarks of Educational Testing Service, Princeton, New Jersey, U.S.A., and used in Japan under license.